

- (14) Stanewsky, R., Kaneko, M., Emery, P., Beretta, B., Wager-Smith, Kay, S., Rosbash, M., and Hall, J.C. (1998). The *cryb* mutation identifies cryptochrome as a circadian photoreceptor in *Drosophila*. *Cell* **95**: 681-692.
- (15) 中島秀明(1998)「時計遺伝子アカハパンカビ」『生物時計の分子生物学』(海老原・深田編, シュプリンガー・フェアラーク東京), pp. 28-37
- (16) Ishiura, M., Kutsuna, S., Aoki, S., Iwasaki, H., Andersson, C.R., Tanabe, A., Golden, S.S., Johnson, C.J., and Kondo, T. (1998). Expression of a clock gene cluster *kaiABC* as a circadian feedback process in cyanobacteria. *Science* **281**: 1519-1523.
- (17) Iwasaki, H. Taniguchi, Y., Ishiura, M. and Kondo T. (1999) Physical interactions among circadian clock proteins, KaiA, KaiB and KaiC, in cyanobacteria. *EMBO J.* **18**: 1137-1145
- (18) Ouyang, Y., Andersson, C.R., Kondo, T., Golden, S.S., and Johnson, C.H. (1998). Resonating circadian clocks enhance fitness in cyanobacteria. *Proc. Natl. Acad. Sci. USA* **95**: 8660-8664.
- (19) Green, C. B. (1998) How cells tell time. *Trends Cell Biol.* **8**: 224-230
- (20) Tosini, G. and Menaker, M. (1998) Multioscillatory circadian organization in a vertebrate, *Iguana iguana*. *J. Neurosci.* **18**: 1105-1114

U.S./Japan Workshop on Molecular Chronobiology に参加して

(1998年12月5日～7日、鈴鹿サーキットホテル)

吉村 崇

名古屋大学大学院 生命農学研究科

1998年12月5日-7日にかけて、U.S. / Japan Workshop on Molecular Chronobiology が NSF Center for Biological Timing と文部省国際学術研究の支援により鈴鹿サーキットホテルにおいて開催された。このワークショップは Dr. Gene Block (ヴァージニア大学) と海老原史樹文先生(名古屋大学大学院生命農学)をチェアとして前年のサンフランシスコに続いて行なわれた。今回はアメリカから9名、日本から41名の参加者があった。ところで鈴鹿サーキットで行なわれたことについて参加者の中では主催者が自動車好きなのは、などの憶測が飛び交っていたようであるが、そういうわけではない。アメリカからの参加者は日本通ばかりであり、彼らが一度も訪れたことのない日本人の心の故郷(?) お伊勢さんと海の幸を楽しんでもらおうという狙いがあったのである。また鈴鹿サーキットで

は自動車レースの最高峰、F1のレースが毎年開催されており、外国人宿泊者の受け入れ体制がしっかりしているということも開催地決定の要因となった。

さて肝心の会議であるが、やはり現在最もホットな時計遺伝子についての発表を中心に最新のデータなども飛び出し、熱いディスカッションが繰り広げられた(写真1)。最近この分野の関心は時計遺伝子に集中しているが、それ以外の発表も興味深いものが多かった。特に Dr. Menaker の発表は恒明条件下で飼育し、網膜が退化したアルビノハムスターでは概日光受容と季節繁殖における光への反応性が異なるというもので、概日光受容器とは別に季節繁殖のための光受容器の存在を示唆するものであった(写真2)。彼ならではの仕事に、異なる視点が重要であることを改めて考えさせられた。今回、日本からの発表者は若い人達が多く、良い経験に

なったのではないだろうか。個人的にはせっかくの良い機会に発表できなかったことが残念だった。

夜は外国人参加者とともに露天風呂を楽しんだ。度々日本を訪れているアメリカの参加者も温泉は初めての人が多く、浴衣を着たりして、日本の文化を楽しんでいる様子だった。また私を含めた数人は Dr. Kay, Dr. Johnson, Dr. Green, Dr. Day とともに Karaoke へ繰り出し、遅くまで熱唱していた。その辺りを散歩していた人によると、その歌声は遠くまで響きわたっていたようである。Excursion ではお伊勢さんの外宮と内宮を観光し、志摩でとれたての海の幸をお腹がはちきれんばかり堪能した。

今回の会議はこじんまりとしたものであったおかげで、特に若い参加者にとっては世界をリードするアメリカからのメンバーとディスカッションできるいい機会が持てたのではないかと思う。このワークショップは11年度から近藤孝男先生(名古屋大学大学院理学)へ引き継がれて開催される予定であり、次の会議が待ち遠しい。



写真1



写真2